

歳以上の85頭のうち84頭が最低1度は飲みきた。しかし、呈示を反復するうちに、リーダー・メスガシラを含む9歳以上の年長個体は、摂取量を著しく減少させていった。いっぽう、1～3歳の多くは、何回呈示しても回避を学習するには至らなかった。液体の飲み口のまわりには常に数頭のサルが群がっており、そうした、摂取を促進するような社会的刺激が、年少個体の回避行動を妨げたのではないかと考えられる。

これとは別に、集団ケージ内で飼育されている2歳前後の小集団(6頭)における毒物回避行動の伝播の有無を検討した。まず、小集団の全個体が食べるような食物を選び、最も優位な個体1頭に対して、それを完全に食べなくなるように食物嫌悪条件づけを行った。再度ケージ内に同じ食物が与えられたとき、最優位個体のみはそれを回避したが、他の5頭はなんら躊躇せず食べ続けた。

(1)、(2)を通じ、安全な食物を食べ始める行動については社会的要因の影響が顕著に示されたが、有毒食物を避ける行動についてはそのような影響を示唆する結果は得られなかった。

現代人の骨盤計測値における性差の集団間変異

今村 薫(京大・理)

性差そのものが、集団によって異なる可能性がHanihara(1978)の研究等から示唆されているが、統計的に検証されてはいない。本研究は、性差の集団差の有無を統計的に明示し、性差の集団間変異について考察を加えることを目的としたものである。

資料として、京都大学解剖学教室所蔵近畿人(男性80, 女性40)、長崎大学解剖学教室所蔵九州人(男性40, 女性70)、近畿大学解剖学教室所蔵インド人(男性88, 女性44)の寛骨および仙骨を用い、41項目の計測値について検討した。

1) 要因判別分析により、性差、集団差、性差の集団差を検定した。性差は3集団とも有意差があり、集団間の距離も3集団の間で有意差がある。しかし、性差の集団差では日本人の2集団間には有意差はなく、この2集団の各々とインド人との間には有意差が見られた。

2) それぞれの集団内における計測項目ごとの性差を、集団間で比較するため、性差の偏差折線

を描くと、近畿人と九州人はパターンが同じだが、インド人とは異なる。

3) 男性が有意に大きい計測項目、女性が有意に大きい計測項目を選びだし、それぞれの計測値に重みづけの係数をかけて合計し、男性的スコア、女性的スコアを算出した。インド人は、日本人2集団とスコアの大きさにおいて分離され、日本人2集団のうち、近畿人は女性的スコアにより性差がみられ、九州人は男性的スコアに性差が現われる。

以上のことから、性をわける要因と、集団を特徴づける要因は、必ずしも独立ではないことが明らかにされた。

霊長類の比較内分泌学的研究

鳥居隆三(滋賀医大)

類人猿のチンパンジーから、原猿類のガラゴに至る23種のサル類について、血糖値とインスリン値の測定を行った。その結果、血糖値は、マーモセット科において119～264 mg/dl、リスザルで163 mg/dlと、他のサル類の80～100 mg/dlに比べ高値がみられた。一方、血中のインスリン(IRI)値は、他のサル類に比較して低値を示した。別に行ったマーモセット科の実験の中で、経口糖負荷試験において、IRI値の増加が認められず、さらに、インスリン分泌刺激試験においても何ら増加が認められないことを見出した。そこで、動物種差に伴うインスリン構造の相違が考えられたため、マーモセットおよび比較のニホンザルの脾臓の酸-アルコール抽出物につき、モルモット腎の100,000g沈澱をレセプターとして用いたRRA系およびヒトインスリン抗体を用いたRIA系にて、displacement curveを作成した。その結果、ヒト、ブタインスリンに対し、マーモセットおよびニホンザルの抽出物は、いずれも同様の傾きをもつカーブを示した。これらのことから、マーモセットのインスリンは、構造上ニホンザル、ヒト、ブタと大きな差はなく、ヒトのインスリン測定系(RIA系)にて測定され得ることが分った。この結果、マーモセット類は、高血糖、低インスリン値、およびインスリン分泌刺激に対する感受性の低下を示す、特有の脾内分泌機能をもつことが推測された。しかしながら、これらマ